

「ハワイ・ピジン」覚え書

神 崎 浩

昨年、ハワイのピジン英語に関する辞典を出版した。その時集めた資料や、その後手に入ったものが、中途半端なかたちで手元にある。この辺でひとまず区切りをつけて、また本業のアメリカ文学の研究に戻るために、ピジンに関して自分なりにまとめてみた。

1. ピジンとは何か

ハワイで話されている言語は英語である。しかし、その英語がアメリカ本土で話されている標準英語の基準から見れば、かなり変形されたものであることは、周知の通りである。これを一般に「ハワイ・ピジン英語」と呼んでいる。

それでは、ピジンとはどのような言語を指すのだろうか。まず、その定義から見ることにしたい。

「お互いに共通の母語をもたない人々が、ある特定の目的で接触し、コミュニケーションが必要になると、そこにごく少規模な言語体系が生まれる。これがピジン (pidgin) である。接触する人人はそれぞれ自分の母語を別にもっており、彼らが所属する発話社会ではもっぱらその母語を使うわけであるから、ピジンは特定の目的にのみ用いるいわば補助言語 (auxiliary language) ということになる」⁽¹⁾

これをもう少し簡単にすれば：

「コミュニケーションの手段として用いた母語でない言語」

と定義することが出来る。

ここで「母語」という表現が出て来るが、これは“mother tongue”のことであって、従来は「母国語、自国語」として訳され、用いられたものである。それが何故「母語」となったかということに関しては、田中克彦著「ことばと国家」(岩波新書)に詳しく書かれているので、それを参照されるといい。

「母国語とは、母国のことば、すなわち国語に母のイメージを乗せた煽情的でいかがわしい造語である。母語は、いかなる政治的環境からも切りはなし、ただひたすらに、ことばの伝え手である母と受け手である子供との関係でとらえたところに、この語の存在意義がある。」⁽²⁾

さて、ピジンは誕生した初期の段階では、語彙の数が極端に少なく、その大多数は接触の時に優位に立っていた集団の母語からの借用語である。文法構造も単純で、短かい平叙文、それに命令文と疑問文ぐらいなもので、長く複雑な会話には適さない。そこでこの集団同士の接触が跡絶えればピジンも消滅することになる。また、集団の接触が長期に渡って続けば、どちらかの集団が母語を使用することを放棄することによって、もう一方の集団の言語が定着し、ピジンは次第に姿を消して行くのである。

ピジンの発生は、貿易や軍事、植民などによって起るのが普通である。ことに15世紀以降においてヨーロッパ諸国が植民地を拡大し、それに伴って世界各地でスペイン語、フランス語、英語、ポルトガル語などの、ヨーロッパ諸国の言語と、現地の言語との間に多数のピジンが生れている。

この場合、ヨーロッパ人と現地人との関係は、雇い主と現住民の使用人という関係となるので、ヨーロッパ言語の模倣という形を取らざるを得ない。しかし、土着の現地語の発音及び文法的特性は一朝一夕には変えることはないので、模倣された言語は不完全な言語であるかのように誤解される傾向にある。

模倣する側とされる側の、双方の言語の間には、言語的な共通点に何も無いのだから、模倣によって生れた言語はモデルとなった言語から見れば、極めて舌足らずの聞き苦しいものであることは言うまでもない。それを模倣者側の知能の低さと関連しているものと早合点してしまうことがある。そこでモデルの側は出来るだけ簡単な短かい文章で相手に話し、模倣者の方もそれが正しい話し方だと思い込んで簡単な話し方をする、といった悪循環が行なわれる。

モデル言語となったヨーロッパ諸国の白人達は、自分達の伝統ある言語だけが立派な言語だと考えていた。その言語の模倣も満足に出来ない者は、肉体的に欠陥があるからまともな言語を話す能力がないのだと思っていた。ピジンは常に劣等言語であり、出来そこない言語である。このような言語を使用することは、人類のためにもピジンの話し手の幸福のためにも放置するべきではないと真剣に考える人も多い。

ところが、例えば、ピジン英語のモデルとなる英語自体、アングロサクソン語とノルマン・フランス語との間に出来上ったピジンから発達した言語であることを思えば、ピジンの研究がただ単なる好奇の対象としてではなく、一般言語理論に大きく寄与するものであることは明らかなことである。

2. ハワイにおけるピジン英語の成立

ハワイがアメリカ合衆国の第50番目の州となったのは1958年のことである。しかし、ハワイで英語が初めて聞かれたのは、それより180年以前の1778年のことであった。その時期をイギリスの探検家、キャプテン・ジェイムズ・クックと彼の乗組員達が、カウアイ島に上陸した時点をもって最初とすることになんら異論はあるまい。

それから少しすると、太平洋はアメリカの西海岸と中国の貿易港との間を商船が行き来するようになり、途中にあるハワイは水や食物の供給所と

して、これらの商船が立寄るようになった。この貿易では英語がアメリカから中国の港に持ち込まれるようになり、ポルトガル語と広東語の混ざった英語が商人や船乗り達の間で使われるようになった。これがピジン英語の始まりである。ピジンは英語の business を広東語なまりで発音するとピジンと聞えたところから、business English を pidgin English と呼ぶようになった、という説が現在では通説となっている。

だがこれ等のピジン英語がハワイの英語に影響を与えることはまったく無かったといっている。この時代には、まだハワイでは英語が使われたという記録はないのである。

ハワイで英語が本格的に使われるようになったのは、1820年に New England から宣教師達が到着してからであった。彼等はキリスト教の布教を行うと同時に、それまでは話し言葉としてだけの機能しか持たなかったハワイ語に、自分達のアルファベットの文字を当てはめて、書き言葉として記録出来るように工夫し、母音5つ (A, E, I, O, U) と子音7つ (H, K, L, M, N, P, W) で、どんなハワイ語でも書き表わせるようにした。

それと同時に、彼等はハワイの貴族階級の人々に英語を教え始めた。記録によると、1821年には、約200人の人々が英語を習っていたということである。そして、1854年の終りには、10の英語学校が開校していたのであった。⁽³⁾

この時代のキリスト教宣教師達の布教に対するエネルギーは、現在の我々には想像もできないくらい強烈なものであった。彼等は文字通り世界の隅々まで、文化果てる僻地にまで出向いて行き、ただ単にキリスト教の布教だけに留まらず、西欧文明を紹介し、教育や医療の面で原住民達の生活改善に努力貢献したことは、今更ここで改めて書くまでもなく良く知られている事実である。

しかし、こと英語に関していえば、まだこの時点ではハワイの貴族階級の教養の一部という程度のものだった。当然ピジン英語も発生していな

い。ハワイアン達は、自分達のコミュニケーションのための言語を持っていたので、なにも習い覚えた不十分な言語である英語で、意志の疎通をはかる必要はなかったからである。

その英語がハワイ語に取って代って、一般の人々の間に浸透して行ったのは、砂糖キビ産業が盛んになった1870年代以降のことと想像される。

Derek Bickerton によれば、1870年代ではまだプランテーションでの労働に用いられる言語はほとんどがハワイ語だった、ということである。

「ピジン英語が1876年以後、ハワイのプランテーションで用いられた最初の接触言語ではおそらくなかったであろうし、唯一のものでもなかったのは確かである。ピジンはハワイ語を基盤とし、オレロ・パイアイ (olelo páiái) 「タロ語」として知られていて19世紀の最後の20年間に広く用いられ、しかもそれ以後数年間用いられ続けたであろうと推定される。……これまでのところ、ピジン英語がピジン・ハワイ語と並んで発達したのか、あるいは、前者が徐々に語彙を入れ替えることによって、後者から生じたのかを結論づけることは不可能である。……それでも、オレロ・パイアイが存在していたために、ピジン英語の発達が遅れたということは確実に言える」⁽⁴⁾

いづれにしても、ハワイでピジン英語が誕生したのは、砂糖キビ畑の労働力として他の民族が大量に入って来てからである。現在のように機械化されるまでの砂糖キビ農業には人手はいくらでも必要であった。そのために、世界各地から農場労働者がハワイに入移するが、彼等は各々の母国語を持って来ているので、異民族同士が意志の疎通をはかるには当然何か共通語が必要となる。その共通語として、ハワイ語も当然使われたが、やはり主体となったのは英語であった。これは、砂糖キビ産業だけに限らず、日常生活の面においても、早くから、ハワイに来て文化や教養など多方面に渡って、原住民達に大きな影響を与えて来たのが、英米人達であったこ

とを考えれば、当然といえるかも知れない。

だが、農場労働者として入植した移民達は、正式な教育を受けることもなく、日々の労働に追われ、普段は母国語だけを使っているとしてもそれほど不自由のない生活を送られたので、英語も必要最少限の知識さえあれば、それ以上の正確な英語を用いる必要性はなかったようである。そのために、文法は極端に簡略化され、発音は各々の母国語の持っている音声面での特徴をそのまま残し、基本的な構文は一応英語の構文ではあるが、そこに用いられる単語には、英訳不可能か、または英訳ができてても説明的になる場合は、母国語をそのまま用いてしまう、という独特な英語が出来上った。これがハワイ・ピジン英語の成立した過程である。

3. ハワイ・ピジン英語の中の日本語

現在ではピジンの段階にもかなりの差があって、標準英語とほとんど区別がつかないものから、初期のピジンそのままといったものまで、あらゆる階層の英語がハワイでは使われている。

そのピジンの中で一番目立った特徴を取り出すとしたら、やはりそこに用いられている外国語からの借用語の多いことに止めを刺すことになるだろう。

土着のハワイ語はいうまでもなく、日本語、中国語、朝鮮語、ポルトガル語、フィリピン語、サモア語、その他数え上げればきりがなほどの外国語が単語として、あるいは短文として、さらにはそこから派生した合成語として用いられている。

そして、時にはそれ等の借用語が、本国で使われていた通りの意味としてそのまま使われるのではなく、次第に変形してしまっているものもあるので、なかなか厄介なことになる。

現在ハワイに在住する日系人は人口の約35パーセントを占めるといわれている。そして、日系人達の社会的地位も上り、社会をリードする地位に

着いている人達も多い。そのためか、ハワイ・ピジンの中には多くの日本語が使われている。しかし、その日本語にしても本来の意味から変形したものが少なくない。

atsui「暑い」という本来の意味もあるが、「セクシーなもの」の意味もある。She's *atsui*, yeah? (彼女はセクシーだな)

bachan「日本人のおばあさん」baban という言い方がいちばんよく聞かれる。

benjo「便所」Where's *benjo*? (トイレはどこかな)

bento「べんとう」レストランの定食ランチも *bento* である。Who ordered da *bento*? (定食を注文したのは誰だ)

bocha「風呂」ポチャンという音からきている。You take *bocha* first. (お前が先に風呂に入れ)

boro-boros「いちばんボロな服」発音は「ボドボドズ」

chawan cut「茶わんをかぶせたようなヘヤー・スタイル」

daikon legs「大根足」日本語と英語の合成語である。

5—4—4「トイレに行く」読み方は“five-four-four”なのだが、意味は“go shi-shi”

giri-giri「つむじ」発音は「キディギディ」となる。

go shi-shi「トイレに行く」合成語。

hanabata「鼻水」鼻から出るバターのようなものという意味なら日本語と英語の合成語である。

hanakuso「鼻くそ」

ichiban「最高, 一番」

itai「痛い」

junk an' a po「ジャンケンポン」日本のジャンケンがハワイでは「ジャンカナポ」となる。「あいこでしょ」は「アイカナショ」である。

mama-san 「おばさん」 本来の「ママさん」より「おばちゃん」に近い意味として使われる。英語と日本語の合成語。

mochi man 「日系のタフ・ガイ」合成語。

musubi 「梅干し入りのおにぎり」 「おむすび」や「おにぎり」では通じない。

nenne 「寝る」 It's *nenne* time. (寝る時間だ)

samurai 「日系タフ・ガイ」 mochi man と同じ。

sashimi 「刺身」 ハワイの刺身はワサビよりマスタードで食べることのほうが多い。

shibai 「うそ」 日本の芝居から来ているが、ドラマの意味で使われることはない。

shoyu 「醤油」 白人がご飯にかけて食べるもの。

sushi 「すし」 ハワイのすしは基本的には関西風の「太巻き」である。

zori 「ビーチ・サンダル」 和服を着た時に履く草履ではなく、ゴムのビーチ・サンダルである。

以上がハワイの英語に含まれている日本語だが、もちろんこれが全てではないし、またこれ等の日本語が必ずしも全てのハワイの人々に使われているというわけでもない。

4. カリフォルニアの日系ピジン英語

今、手元に *The Hawaii Hochi* 紙の切り抜きがある。“Issei English compiled for posterity” という見出しのついた記事で *Pacific Citizen* 紙からのリプリントされたものだとなっている。

“Thousands of Issei have lived for decades in the United States, but many of them didn't have an opportunity or were too busy working to master the English language.

But many of them knew a smattering of the language and often used some words, either in combination with Japanese words or in their version of the English words.....”(5)

アメリカ本土に渡った日本人達も、ハワイの一世達と同様に、正式の英語教育を受けることなしに、ただコミュニケーションの目的としてピジン英語を使っていたことがわかる。ただハワイと違っているところは、彼等の使用したピジンはピジンのままで一代限りで消滅する運命にあった、という点である。

しかし、彼等のピジンが日本語を下敷きにしたものであるのでハワイの一世達のピジンとの共通点は多く認められるのは当然である。

English-Japanese Combinations as Pronounced by the Issei

me-to yu-to (me and you) me-no, yu-no (mine, yours) me-ga, yu-ga (I will, you will) me-ra, yu-ra (us, you all) anda mono (underwear) go homu kutta (fired from job) pura-patsu (overalls) donguri pantsu (dungaree) me shiran yo (I don't know) me ikanyo (I won't go) me mo iku (I'm going too) you iku? (are you going?)(6)

English Words as Pronounced by the Issei

ai-no (I know) zatsurai (that's right) no sankyu (no thanks) gerareheya (get out of here) tsumachi (too much) hai-kara (high collar, classy) zatsuwan (that one) oru se-mu (all same) hari-yappu (hurry up) gum monin (good morning) hawayu? (how are you?) inafu (enough) essa (yes sir) donkeya (don't care) jasto menetsu (just a minute) bosu (boss) osamarayu? (what's the matter with you?) gu-bai (good bye) haamachi (how much) mi-shin (machine) yu-orai, mee-orai (we're friends)

namba wan (No. 1) bambai (bye and bye) gun nai (good night)
 orai (all right) ai donno (I don't know) gimi (give me) sha-
 rappuyu (shut up you) no gu (no good)⁽⁷⁾

以上がアメリカ本土の日本人一世達の使っていたピジン英語の一部だが、ハワイでの日系人が使った初期のピジン英語と大きく違っているのは、ハワイ語がこれに加わるという点だけである。

5. ピジン英語の発展

アメリカ本土の日系人が使用したピジンが一代で消滅したように、普通ピジンは短期間のうちに消滅してしまうものである。ところが、ハワイのように英語を初めとしてハワイ語、日本語、中国語等々多くの言語を持った多言語社会の共通語としてピジンが使用されると、なかなか消滅しないどころか、発展をとげるようになる。

まず、言語としての完成度が高まって、語彙が増加し、文法がととのって来る。この時、ピジンの発生原因となったどの言葉にもない新しい表現が生れる。

次に、文字を持つようになる。文字でピジンが書き表わせるようになれば、必要なことを十分に表現出来る段階に達したと判断される。

そして、ピジンを母語として使用する者が誕生する。母語として話す者が生れると、そのピジンはクレオールと呼ばれるのである。

ピジンは外国語の知識が十分ないのにコミュニケーションの手段としてその言語を用い、未知の社会で日常生活を支障なく送るという目的のための、意識的な外国語の成果なのである。

それ故、ピジンは一般に無教育で社会的にも低い層にいる者が用いる言語だと誤解されがちであるが、ピジンを特定の目的を果すために生れた新しい言語として理解すれば、今後のピジン研究の方向も自ら定まってくる

ように思われる。

参考文献

Elizabeth Ball Car: *Da Kine Talk*, The University Press of Hawaii, Hawaii, 1972

Douglas Simonson, Ken Sakata and Pat Sasaki: *Pidgin to Da Max*, Peppovision, Hawaii, 1981

Douglas Simonson, Ken Sakata, Todd Kurokawa and Others: *Pidgin to Da Max, Hana Hou*, Peppovision, Hawaii, 1982

田中克彦 「ことばと国家」 岩波新書 1982

デレック・ピッカートン 「言語のルーツ」(邦訳) 大修館 1985

神崎浩編訳 「ハワイ俗語辞典」 研究社 1985

雑誌 「言語」11月号 大修館 1985

注(1) 「言語」'85年11月号 p. 40 杉本豊久: ピジンとは何かクレオールとは何か

(2) 「ことばと国家」 p. 41

(3) E. B. Car: *Da Kine Talk* p. 4

(4) 「言語のルーツ」 p. 9~10

(5) *The Hawaii Hochi* 紙, '83年10月頃と思えるが詳細不明

(6) 同上

(7) 同上